

「子句」について

——主述連語との係わり——

安 本 武 正*

On the “Zi ju”

Takemasa YASUMOTO

かつて高い評価を受け、今でもその価値を保っている文法書の中に、呂叔湘・朱德熙両氏著の『語法修辭講話』（中国青年出版 1979）¹⁾と呂叔湘氏著の『語法學習』（同 1955）の二書がある。この二つの文法書の中には、文を構成する成分として子句²⁾というものがあり、それは「主語一述語」と「主語一述語一目的語（または補語）」という二つのパターンを含むものとある。しかし、一方では『漢語知識』（人民教育出版社 1979）³⁾や邢福義氏著の『現代漢語語法知識』（湖北人民出版社 1980）は、このような子句と称している二つのパターンを主述連語と言っている。ここ数年来の文法書も、また殆どそうである。

このような同質異名な現象に対して、趙安寿氏が彼の『詞組和結構』の中で「主述連語はまた子句と言う」⁴⁾と一言触れている。また、復旦大学中文系・復旦大学語言研究室・中国社会科学院民族研究所共編の『辭海（語言文字）』（上海辭書出版 1978）には、「包孕句の中の主述連語を『句子形式』、または『子句』と言う」とある。つまり、この二つの資料の見解によれば、子句は即ち主述連語であるという事になる。

以上の事を考えた場合、上で触れた二つのパターンは、仮にそこに目的語（または補語）が

有無に拘わらず、これは同質のものであり、ただ以前に子句と言った事もあるが、今では主述連語と言って、単に用語の使い方の違いであると言う事になる。

果してそうであろうか、ただ名称だけの違いのみで片付ける事ができるのであるか。小文ではこの点について、上に挙げた二つのパターンを、主に『語法修辭講話』、『語法學習』、『漢語知識』、『現代漢語語法知識』などの四書を中心に検討する事にしたい。

二

すでに触れてきたように「主語一述語」のパターンを『語法學習』（以下『學習』と言う）では子句と言う。また、顧巴彥氏篇の『語法常識』（湖北人民出版社 1957、以下『常識』と言う）にも同じ事が書かれている。たとえば（例文の点線は筆者、以下同）

① 你這個人脾氣太急躁。

② 這本書內容豐富，文章也生動。（以上『學習』p. 71）

③ 大家看見火車來了。（『常識』p. 71）

などの点線の部分の「主語一述語」は、すべて子句であると述べている。しかし、これと同じものを『漢語知識』と『現代漢語語法知識』（以下『漢語知識』と言う）では、主述連語であると言う。たとえば

④ 她性格和藹

昭和 58 年 11 月 30 日受理

* 一般教育部講師